

アダム—神の使い 悪魔の子—

2006(平成18)年10月14日鑑賞(ホクテンザ2)



監督=ニック・ハム/出演=ロバート・デ・ニーロ/グレッグ・キニア/レベッカ・ローミン/キャメロン・ブライト (ザナドゥー配給/2004年アメリカ映画/102分)

第2章

発想の面白さで見せる

……近時注目のクローン人間をテーマとした意欲作。愛する8歳の息子を失った夫婦に対するロバート・デ・ニーロ扮する産婦人科のクローン人間再生の提案は説得力があり、映画が描こうとするテーマも明確！ しかして、ストーリーの展開はある意味「想定範囲内」だが、問題点続出の中盤からは明らかに異質な展開へ……。そして、実はそれがこの映画の本質的なテーマ。好き嫌いはいろいろあるだろうが、問題提起としては十分……。ただ、結末は中途半端で尻切れとんぼ！ しかしそれは、『ロード・オブ・ザ・リング』と同じように、続編製作のシグナルかも……？

テーマはクローン人間の創造

この映画のテーマは「クローン人間」の創造だが、よくできているのはその動機がきわめて人間的なこと……。映画の冒頭は、ポール・ダンカン(グレッグ・キニア)とジェシー・ダンカン(レベッカ・ローミン)夫妻の一人息子アダム(キャメロン・ブライト)の8歳の誕生日のパーティーの様子が描かれる。ポールは学校で生物学を教える教師、そしてジェシーは写真家として働いているが、この仲むつまじい夫婦の愛情をいっぱい受けて育った息子はホントに幸せそう。誕生日パーティーの様子やお友達が帰った後の両親とのやりとりを見ていると、ちょっと甘やかしすぎではないかと思うほどだが、そこはアメリカ流の子育ては、大人と子供の峻別をはっきりさせているはず……。したがって、誕生日パーティーが終われば、明日の予定に向けて「Good night」もはっきりと……。ところが、この映画では翌日はさらにジェシーはアダムと2人で靴のお買い物に。アダムが

気に入った靴を購入し、ジェシーがカードにサインしようとした時、一足先に外に出ていたアダムは……？

クローン人間をめぐる法的規制

詳しいことはよくわからないが、人間の努力による科学的知見の積み重ねは次第に「神の領域」に近づき、今やクローン牛やクローン羊をつくり出すことは朝飯前になっている……？ 哺乳類である牛や羊のクローンをつくり出すのは、わかりやすく言えば体細胞を利用するだけだから、同じことを人間に適用すれば、ヒトのクローンも簡単につくり出せるはず……？ このことについては、パンフレットにある山辺健史氏の「『アダム』に描かれたクローン技術」を是非勉強してもらいたい。

単純にそうなるわけではないだろうが、少なくとも1997年に世界中の注目を集めた「ドリー」と名づけられたクローン羊の成功によって、その可能性が高まったことは証明されたとのこと。山辺氏の解説によると、そこでいち早くヒトへのクローン技術の適用を禁止したのは、「ドリー」の実験を成功させたイギリス。これに続いてアメリカでも、ドイツやカナダでも次々とヒトクローンの創出が禁止された。そして、日本は2001年に「ヒトに関するクローン技術等の規制に関する法律」（クローン規制法）を制定し、「何人も、人クローン胚、ヒト動物交雑胚、ヒト性融合胚又はヒト性集合胚を人又は動物の胎内に移植してはならない」と定め（3条）、これに違反した者は「十年以下の懲役若しくは千万円以下の罰金に処し、又はこれを併科する」との罰則を定めた（16条）。したがって、倫理的にも宗教的にもそして法的にも、ヒトクローンをつくり出すことは不可能なはず……？

天国から地獄へ、そして……？

ガラス越しにジェシーが見たのは、愛する息子が交通事故に巻き込まれる無惨な姿。これによって、文字どおり天国から地獄へ落ちてしまったポールとジェシー夫妻は、今日やっと葬儀を済ませ涙にくれながら帰ろうとしたところ。そこに声をかけてきたのが、初対面となるリチャード・ウェルズ博士（ロバート・デ・ニーロ）。悲嘆にくれている2人に対して、とにかく話を聞いてくれと強引にレ

ストランに案内したウェルズは、自分はヒトクローンの研究をしている産婦人科の医者であると自己紹介したうえ、ポールとジェシーに申し出たのは、アダムのクローンをつくり出すというとてもない提案。ウェルズが言うのは、アダムのDNAを運ぶ幹組織をジェシーの子宮に着床させれば、アダムのクローンの創出すなわちアダムの再生が可能だというとてもないこと……。 「そんなことは、倫理上も医学上も法律上も許されない！」と即座に反論するポールだったが、ウェルズと別れたその夜の夫婦間の「議論」は深刻な内容に……。そして結局は……？

クローン人間と人工受精の境目は……？

クローン人間をテーマとした最近の映画が2019年の近未来を描いた『アイランド』(05年)だったが、これは大量に本格的クローン人間が出回っている時代のちょっとコワイお話(『シネマルーム8』136頁参照)。これに対して「人工受精」は、既にいくらかでも事例がゴロゴロしている問題。そして、もっと人間的な欲望がガラガラしている面白かった映画が先日観た『セレブの種』(04年)で、これはそのタイトルどおり、あくまで種=雄の精子の特定とその価値をテーマとしたドタバタ劇……。『アイランド』の世界ではクローン人間の創出は単純な技術上の処理となっていたが、『アダム—神の使い 悪魔の子—』では、あくまでアダムのDNAが生きている間に生身のメスであるジェシーの子宮にそれを着床させることによってアダムのクローンをつくり出す(産む)わけだから、これはかなり人間的な作業。したがって、映画の中でウェルズが言うように、着床に成功した後は、流産の危険その他は通常の妊婦・出産の危険と同じもの。このように、よく考えてみれば、法的に許されないクローン人間と法的に許される人工受精との境目は、実は微妙で難しいもの……。

てっとり早く次のテーマへ……

この映画の前半は、アダムの死亡とアダムの再生(クローン人間の誕生)をテンポよく描いていく。したがって映画の冒頭、8歳の誕生日を迎えたアダムがケーキ上の8本のローソクを消していたのと同じシーンが、クローン・アダムの8歳の誕生日において再現される。アダムの突然の事故死によって悲嘆にくれていたポ

ール、ジェシー夫妻はウェルズの提案によるアダムの再生によって生きる希望を取り戻し、クローン・アダムの誕生とともに両親も再生したことはまちがいのない事実だった。したがって、ポールとジェシーにとって本来のアダムとの8年間プラス、クローン・アダムの8年間は、家族の幸せに浸りきることでできた16年間だった。

ここで確認しておかなければならないのは、後半8年間のポールとジェシーの幸せは、ウェルズによるアダムの再生とポールへの仕事の世話や豪邸の提供その他、すべてウェルズの尽力によるものだったということだ。そのことはポールもジェシーも十分理解していたが、もともとウェルズの教えを受けた学生であったジェシーと、自分自身も生物学の教師をしておりクローン技術についてそれなりの知識を持っているポールとでは、その感謝の度合いに温度差が……？

2時間枠の中で、アダムの再生にまつわる問題点を観客にアピールしなければならないこの映画としては、アダムの再生による両親の幸せな状況を観客に理解させることに成功すれば、早く次のテーマに移らなければ……。そして次のテーマは、クローン・アダムの8歳の誕生日を終えた後……。ウェルズも、8歳を迎えるまでのアダムは予測できていたが、実はそれ以降のアダムがどうなるのかは全く未知の世界だった……？

アダム VS ザカリー・クラーク

8歳の誕生日を過ぎたアダムには、それまでのかわいくて愛されるクローン・アダムとは別の人格が芽生えたようで、徐々にその行動に異変が……。もっとも、それは夜眠っている時にアダムの夢の中で生じているようだったから、ウェルズは一般的な症例として認められているある病名で処理するとともに、ウェルズも未知の分野においては「互いに」見守っていくしかないことを確認……。しかし、クローン・アダムの行動の異変は次第にエスカレートし、両親の前でも、学校の友人たちに対してもかなりヤバイ行動を……。そして遂には、アダムの学校の悪ガキが川で死亡するという現実的な被害が発生したが、たまたまその現場に通りがかったのがポール。「まさか……？」と思ったものの、その悪ガキの死体が発見された状況からみれば、それにクローン・アダムが絡んでいたのではと考えざるをえないものだった。しかし、そこでポールが疑問に思ったのは、クローン・アダムがさかん

にザカリー・クラークという名前を口に出していること。このザカリー・クラークとは一体誰……？ そして、クローン・アダムとザカリー・クラークの関係は……？

新たな登場人物が……

この映画は、基本的にポールとジェシー夫妻とその息子のアダム、そしてクローン・アダムからおじさんと呼ばれているウェルズの4人しか登場しない。ところが映画後半になって、アダムの行動の異変に気づくとともに、ウェルズのやり方に疑問を持ち始めたポールの行動の中、新たな人物が登場する。それは、ザカリー・クラークがかつて通っていた聖パイアス小学校をポールが訪れることによって明らかとなった、ザカリーのベビーシッターをしていたという女性。ポールがこの女性から聞いたのは驚くべき事実。それは、問題児であったザカリーは自分の母親を殺したうえ、家に火を放ち自分自身も焼死したが、その父親は仕事が忙しくてあまり家に帰ることがなかった産婦人科医とのこと……。つまりそれは誰……？

この映画最大のポイントは……？

ここらあたりから、なぜクローン・アダムがヘンな夢を見るのか、そしてザカリー・クラークという名前を口にするのかが観客にも少しずつ見えてくる……。すなわち、クローン・アダムの中には、アダムのDNAを運ぶ幹細胞のみならず、実はウェルズの息子であったザカリー・クラークのDNAが組み込まれていたのだった。ウェルズはなぜそんなことを……？

それは、ザカリーの死亡によってショックを受けたウェルズが、ザカリーのDNAによってクローン・ザカリーを再生させたかったにもかかわらず、その処置が遅れできなくなったため。つまりウェルズは、ザカリーの再生ができなかった思いを、アダムの再生にダブらせたというわけだ。こんなわけでクローン・アダムの中には、アダムとザカリー2人のDNAが……。これがこの映画最大のポイント。すなわち、8歳をすぎた後のクローン・アダムの中には、アダムとザカリーという2人の人格が共存する状態になったわけだ。なるほど、そこまではわかった。すると、あんなヤバイ行動を起こしたザカリーの人格が同居しているクローン・アダムが、ザカリーの人格で行動すれば、再び母親殺しや放火の行動に走るのでは……？

この映画最大のクライマックスは……？

映画前半は意見が完全に一致していたポールとジェシー夫妻だったが、後半以降ジェシーがあくまで恩師であるウェルズを信頼するのに対し、同じ生物学を教えているポールはウェルズへの不信感を強めていくため、その行動が分かれていくことになる。すなわち、ポールは、クローン・アダムの二重人格の原因を突き止めていく中、アダムがザカリーの人格を受け継いでいることを知り、危機感を強めていくことに。そして、その調査の結果たどりついたのは、ジェシーが危ないということ……。さあ、このように論点が整理されてきた結果のクライマックスを、この映画は観客にどのように提示するのだろうか……？

あまりな「尻切れとんぼ」は、続編狙い……？

この映画に登場している4人の俳優はロバート・デ・ニーロをはじめ一流だし、テーマもそれなりに面白いもの。しかし、なぜかこの映画がメジャー扱いされず、ホクテンザ1館のみの上映となっているのは、多分あまりに尻切れとんぼな結末のせい……？ 尻切れとんぼとなった原因の第1は、コトの真相を知ったポールに対するウェルズのかなり理不尽な行動の後のウェルズの失踪という脚本処理の仕方……？ そして第2は、クローン・アダムによる母親殺しが、ポールの献身的行動によって再現かなわず、未遂に終わったこと……？

この何ともいえない中途半端な結末は、あの『ロード・オブ・ザ・リング』の第1作を観た直後のよう……？ するとこれは、続編を予定してあえてこういう中途半端な形で終わらせたのかも……？ だってそう考えなければ、あれほど冷静で理知的だったウェルズが、教会の中で対峙したポールの頭を突如後ろから殴りつけたうえ、失踪してしまうなどという行動は理解できないはず……。さらに、クローン・アダムの新たな再生を目指して両親は新居に移り住んだのだが、アダムの部屋の中では、押し入れの中から出てきたザカリーの手によってアダムはザカリーに取り込まれることに……。こりゃやはり、どう考えてもニック・ハム監督が、この『アダム—神の使い 悪魔の子—』の続編づくりを意図していることの表れ……？

2006（平成18）年10月17日記